

～キリスト教保育所同盟奥羽地区～

保育研修資料

2018年10月7～8日 江刺保育園 園長 遠藤清賢

I キリスト教保育について

1. 保育は人間として生きることを伝える

保育は「如何に生きるのか」という人としてあるべき「精神と行動」を子どもたちに伝えることです。あるべき「精神と行動」はその時代によって、人間の思いによって変動してきましたが、私たちは主イエス・キリストによって人間としてのあるべき命、生き方、心の有り方を学んできました。私たちがこの世に命を頂いたのは、新しい命の成長を支え、命を育てるためです。そしてそれは自分の持っている命を新しい世代に手渡すということだと考えます。それが今生きている私たちの最大の使命なのだと思います。それは結婚して家庭を持ち新しい命を授かるということだけではなく、たとえ結婚しなくとも、子どもを授かることが無くとも、身近にある命の成長を見守り支えることが私達生きている者に課せられている働きなのだと思います。命を支えるということは、自分自身に与えられた仕事（働き）を、心を込めて一生懸命に働くことによって、自分の知らない誰かの命を支えているのです。私たちは働くことによって報酬を得るのですが、その他に、その働きによって社会の為に何らかの命を支える物や精神を生み出し、多くの人たちの命を支え、新しい命の成長を支えているのです。また、年老いて仕事をしなくなったとしても、家族のことを、近隣の方たちのことを心配し、その安全を祈ることが、多くの人々の命を支えているのだと思います。人間はそれぞれその存在自体が多くの命を支えているのだと思います。何かをすることが出来なくとも、生まれたこと、年老いても生きようとしていること、お互いに支え、支えられて日常を過ごしていることが命を支えていることであり、神様が語っている愛の実践なのだと主は教えてくださっているのです。そのような思いをもって生きるために、また働くために私たちは生かされているのだと私は考えています。私たちが新しい世代に伝えるべき命とはこのように「人はお互いに愛し合って生きる」という命、その営みであるのです。

2. 保育について（キリスト教保育との関連）

主イエスは福音書の中で「神の国に入るのは子どもたちである。」と語っています。幼い子どもたちが神の国に入るのにふさわしい人間であるのです。保育はこの神の国に入ることが出来る子どもたちの命を支え、成長を支える働きなのです。私たちは保育を行うために、人間はいかに生きるのが人間のあるべき姿なのか、神の国に入るために相

応しい人間とは、どのような人間であるべきなのか、人間はどのような精神を持ち、いかなる行動をして生きるのかを自問自答しながら自分の中にこの人間としての命の姿、を持つことが求められています。いかに生きるのかということはいかなる命を持っているのかということです。保育を行う上で自分の命はこのような命であるという確信をもって子どもと関わるのが、求められているのです。その命は神様によって支えられている命であるという確信を持つことが、キリスト教保育の根本になっているのです。先ず初めに神の存在を確信することが全ての根本であるのです。

神様は聖書を通して私たちにどのように生きるべきなのかを語っています。その一つは愛し合って生きなさいと語っています。隣人を愛し、お互いに支え合い、愛し、愛されて生きるのが人間の生き方であると語っています。保育はまさに、神様が教えて下さった「愛し合って生きる」「支え合って生きる」ことを子どもたちに伝える働きです。保育はまさに神様が私たちに求めている生き方を子どもたちに伝える働きであることを確信出来るのではないのでしょうか。保育は子どもたちの成長を支え、その成長を子どもと、その家族、そして多くの人々と共に喜び、子どもたち自身が愛されていることを確認する働きであるのです。そして子どもが生きていることを喜び、生まれてきたこと、自分がこの世に存在することを、喜び、この事実を受け入れ、良しとする働きであるのです。保育はこのような基本的信頼感と自己肯定感を子ども自身が獲得することを目的としているのです。

保育の働きの精神と行動の根本はキリスト教そのものであるのです。保育の業は主イエス・キリストの愛する心とその心に則った行動なのです。神を信じる、信じないに関わらず保育を行うというのはキリスト教の精神をもって行動していると同じであると言えるのです。キリスト教保育と保育を区別していますが、神様の「愛し合って生きなさい」という精神は保育の中で重要な根底になっていて、当然のこととして保育はおこなわれているのです。人間が人間として生きることが出来るのは歴史の中で育まれてきた「互いに愛し合って生きる」という精神とその理想を追い求めてきた行動が現代社会の保育を形成してきたのです。人間は己の欲望を満たすため、多くの争いを続けてきました。その中で犠牲になってきたのは幼い子どもたちであり、その母親達です。母親の子どもを思う心は、神が教えて下さっている愛と同じであり、人間は如何に生きれば幸福であるのかを祈り、それに近付こうと努力してきました。そして、すべての新しい命が幸せであるようにと言う祈りが神様から教えられた愛情によって、母親たちやその家族、全ての人々の中で育まれてきたのです。保育は長い歴史の中に在って様々な問題や争いの中に在っても、その理想は絶えず大きな希望として私たちを勇気づけ、生きるべき方向性を示し続けているのです。そして、神様への感謝と祈りをもって、様々な困難に出会ったとしても忍耐し、立ち返る希望や思いを抱かせてくれるのです。

3. 現代社会とその中で行われている保育

この時代になり、保育が大きく変化してきました。幼い子どもたちと母親とか父親、保護者とか、離れて生活する時間が長くなっているのです。特に0歳児は、20年くらい前は絶えず母親と密着して過ごすことが普通でした。密着しなくても母親の声が聴こえ、その姿を確認できる範囲の中で毎日を過ごすことが出来ていましたが、現代社会はその母親を日中の時間帯では全く確認することが出来ないで過ごしている子どもたちがほとんどなのです。これは核家族化と両親の就労が主な原因だと思いますが、この状態は現代社会では特殊な事ではなく、全く一般的な状況になっています。この状況だけを見れば、親は子供の成長に何も関与しない時代になってしまったようにも見えます。子どもを育てることを親たちは放棄してしまったようにも見えるのです。神の国に入るべき子供たちの成長を家族は支えられない社会になってしまったといっても良いかもしれません。日本に於いて多くの人の心にはキリスト教も、仏教も、イスラムもない状態です。宗教が普通の日常生活の中で機能していない世の中になっているようです。一つの時代も真実の神を忘れてしまった時代は人間の世界が誤った方向に進み、人間自身が苦しみの中で生きてきた歴史が有ります。

このような社会状況の中で保育の働きがこの世を救う大切な手立てとなっていると私は思います。家庭は子どもを育てる能力は失われている時代で、この状況に真正面から立ち向かい、子どもたちの命、同時に人間の命、家族の働きを回復させる働きを保育は担っていることを私たちは強く意識しなければならないのです。日本の子どもたちの現状は、自由に遊ぶ自然が無くなりました。近くに一緒に遊ぶ友達がなくなりました。甘えたい親が近くにいません。子どもたちを取り巻く環境はその成長を支えるべき環境からかけ離れてしまっています。この点において保育園は子どもたちの成長を支えるために無くてはならない大切な場所であり、子どもたちの成長を支える大切な人たちがいる場所となっています。その働きは極めて重要なのです。

4. 保育を行うことが家庭を支援する

保育園では子どもたちの成長を考えた環境構成、食育と食事、心の発達を促す安定的なアタッチメント等の対応が行われています。家庭で失われている子どもを育てる重要な働きを、保育園で行っています。特に20年くらい前は0歳児の母子分離は子どもの成長に重大なリスクがあるのではないかという議論が行われました。しかし、多くの先輩保育士たちの努力によって、安定的なアタッチメントを保育園で行うことによって家庭での不足している子どもたちの心の安定を、保育園の保育によって補償することが出来、さらにより良い家族との関係性を構築することが研究され実証されているのです。安定的なアタッチメントを行い、食育や保育をすることが家庭を支援することに繋がっているのです。このように保育園での対応の積み重ねによって子どもたちがより良く成長できることが保育園を利用した保護者によって確認されてきました。私たちの子どもたちは臨機応変に愛情を感じとり、自分の生きるための力とすることが出来るのです。

神様は子どもたちに生きるための強さと逞しさを与えて下さったのです。このような子どもたち自身の持っている能力に気づき、それを活かし、共感しながら保育が行われてきました。そして、核家族化や両親の共稼ぎによって家庭での保育を保育園が補償するという理由だけではなく、保育園の保育によって子どもたちがより良く成長できることを確認できたからこそ保育園に子どもたちを預ける保護者が劇的に増えたのだと私は考えています。とくに食育や食事の対応や、0歳児保育の対応は保育園の保育の重要性を証明しより良い評価がなされているのです。保育園は認知能力を向上させるということではなく、眼に見えない能力、非認知的能力を向上させる場所であり、この非認知的能力の向上がより良い社会的人間形成のための重要な能力であることが実証されているのです。神の国を創造する信仰心を持つ能力もこの非認知的能力の中にあることに気付かされます。保育園は子どもたちに自分だけが生きるのではなく、自分以外の命を大切にしようとする能力と行動力を育てています。私たちの知る「愛する」心とそのための行動力が保育園の中で育まれているのです。まさに保育園が神の国に入る人間の成長を支えていると言えます。言い換えれば神の国の創造の働きを保育園は実践しているといえるのではないのでしょうか。保育をすることが、神様の、そして主イエス・キリストの業を行っていることを意識して欲しいと思います。信仰が有る無に関わらず、保育は神の行為であり、その最前線で働いているのがここにいる保育園の職員一人ひとりであると言えるのです。保育はの働きは尊く、神の国を創造し、人間の未来を希望有る世の中にする大切な働きであると確信しています。

5. 保育者は神の働きの代務者

保育園職員として働くこのことにより、保育は神の働きであることを共感し、神様の働きを感じとり、感謝できるのであれば、信仰を告白し、洗礼を受けてクリスチャンとして生きるべきであると私は思います。日曜の教会の行われている礼拝は神様との応答の時です。その中で自分が生かされ、保育の働きをしていることを感謝し、自分が罪深い過ちをしてしまったと思う時は赦しを請い、新しい日々を生きる希望と力が与えられることを願い、子ども達一人ひとりの幸せを祈り、その保育ができる新たな力を得、新しい日々も喜んで生きることを確認する時間が礼拝なのです。クリスチャンになることによって自分の心に自分自身を支え、励まして下さる聖霊の働き(神様の働き)が増し加えられるのです。信仰を持たない保育園で働いている皆さんにも、その力が働いているのです。そして自分の為に誰かがいつも祈っているのです。特に子どもたちが私たちのことを祈ってくれているのです。そして、私たち自身もみんなの為に一人ひとりの職員のために、子どもたちの健康を、幸せを祈っている自分自身に気付くと思います。そして私たちは自分自身の為だけに保育をしているのではなく、皆の命を支えるために保育園で働いていることに気付くと思います。礼拝を守る時間が皆さんに与えられることを心から祈っています。